

放送文化基金は「放送界の広場」

鈴木 嘉一

放送文化基金のスタッフから、50周年記念号に原稿を書くよう依頼の電話があり、思わず「放送文化基金にはさんざんこき使われてきたなあ」と言ってしまった。もちろん冗談だが、考えてみればこの30年余り、放送文化基金賞の選考をはじめとしてさまざまな事業やイベントにかかわり、「放送文化基金はNHK、民放、制作会社の枠を超えて、制作者と視聴者が自由に交流できる広場」と実感している。そうした「放送界の広場」に出入りしてきた立場から、基金の活動や軌跡を振り返りたい。

見方が鍛えられた基金賞の選考

読売新聞記者だった私が放送の取材を始めたのは1985年だから、40年近く放送界をウオッチしてきたことになる。放送文化基金賞の審査に当たる専門委員を頼まれたのは92年なので、基金とのつき合いも長い。

専門委員長は当時、テレビドキュメンタリー部門が作家の井出孫六さん、テレビドラマが映画監督の吉田喜重さん、ラジオが作家の常盤新平さんだった。私はドラマから始まって、ドキュメンタリー、ラジオを担当したので、3人とはじかに接した。委員の顔ぶれはそこそこ、長く放送界を取材してきた各紙のベテラン記者や新聞社OBの放送評論家が各部門に3人はいた。私は若手の部類に属したので、当初は緊張したが、臆せずに自分の意見を言うよう努めた。テレビマンユニオン元社長の村木良彦さん、TBS出身の演出家堀川とんこうさん、脚本家の竹山洋さん、写真家の大石芳野さん、後に法政大学の総長となる田中優子さん、歌人の小島ゆかりさんらは、私たち放送

担当記者とは違う角度で番組を評し、「そういう見方や視点もあるのか」と教わったことは多い。

審査後の懇親会では、委員長たちが興味深い話を披露してくれた。井出さんは中央公論社（現・中央公論新社）の編集者時代、吉田監督は松竹時代の思い出などを語った。吉田監督に松竹ヌーベルバーグについて尋ねると、「私はヌーベルバーグではありませんよ」と言下に否定した。「自分は自分。ほかの監督たちと一緒にしてくるな」というニュアンスを感じた。早川書房出身の常盤さんはぼそぼそした口調で、どこかとぼけたユーモアを漂わせた。選考会では、水が高いところから低いところに流れるように自然な進行ぶりが印象に残っている。

番組を批評し、選考する行為は、「そういうお前はいい、何者なのか」と問い返されることでもある。基金賞の選考では、さまざまな分野の人と議論し、自分の見方や評価基準が鍛えられたのは間違いない。

贈呈式には昔も今も、できるだけ顔を出すようにしてきた。受賞者たちがスピーチで素敵なエピソードを話してくれるからだ。その後のパーティーは彼らと会話を交わすいい機会であり、楽しみなひと時でもある。

意義深い番組の企画選奨

基金が設立20周年記念事業の目玉として93年から隔年に実施した「テレビ番組の企画選奨」では、井出さんを委員長とする専門委員会の委員を委嘱され、NHKの名ドキュメンタリスト相田洋さんらとともに第1回から選考に当たった。設立10周年の際は、日本の放送局だけを対



放送文化基金賞テレビドキュメンタリー部門の審査後の懇親会にて。
前列左が専門委員長の井出孫六さん（2004年）

象としてテレビドキュメンタリーの企画選奨を実施したのに対し、20周年事業ではアジア全域に対象を広げ、制作会社やフリーの制作者にも門戸を開放したのが大きな特徴だった。

「アジアのいま」をテーマにしたドキュメンタリーの企画を募集し、入選した2編には制作費の一助としてそれぞれ奨金1000万円を贈るというものだ。実際には、第1回は3編が選ばれ、1000万円1編と500万円2編に分割された。2回目からは奨金総額が2500万円に増えて、3、4編を入選とした。

第1回には国内外から139件の応募が寄せられた。毎回100件を超え、4、5回目は200件に迫った。5回目までの国内入選企画をみると、プロダクション勢が目立ち、8編のうち6編を占めた。ドキュメンタリーでは定評のある大阪のドキュメンタリー工房の平岡磨紀子さんの『おっぱいをほしがらないで〜アジアのエイズ孤児と母子感染〜』、ドキュメンタリー映画で知られた佐藤真監督（カサマフィルム）の『砂糖きびの島・ネグロス〜農業の島への自立への道〜』などだ。

海外ではベトナム、インド、中国、イラン、韓国などからの企画が選ばれた。中国や韓国では、急激な経済成長の光と影をみつめ、都市と農村の格差の増大や近代化の歪みをテーマとする企画が多かった。発展途上国では乱開発や自然破壊、公害、男女差別、女性や子供たちへの暴力、売春など深刻な社会問題が目についた。

企画選奨の成果については、第2回に入選したRKB毎日放送の名ドキュメンタリスト木村栄文さんの『月白の道〜戦場から帰った詩人〜』が放送文化基金賞を受けたこ

とを挙げたい。地元福岡が生んだ詩人の丸山豊の従軍記を基にして、過酷な戦場に咲いた一輪の花のように人の心を打つヒューマンイズムと、戦争を語り継ぐとはどういうことかを描いた。第5回に入選した熊本放送の村上雅通さんの企画は『水俣病 空白の病像』として放送され、文化庁芸術祭賞優秀賞やギャラクシー賞優秀賞を受けた。いずれも日本民間放送連盟賞最優秀に選ばれた『市民たちの水俣病』や『記者たちの水俣病』に続き、「医学者たちにとっての水俣病」をテーマに据えた。

こうした企画選奨は、制作者の志や情熱を受け止め、優れた企画を実現する意義深い事業だった。

東京と地方でのフォーラム

私が基金に出入りし始めたころは毎年、NHK放送研修センターの主催で基金賞記念公開フォーラムが開かれ、「放送文化基金報」にその報告を書いてきた。「いま、私がテレビで問いかけるもの」を統一テーマとし、受賞者たちがパネリストを務めた。進行役の吉田直哉・武蔵野美術大学教授は、NHKでドキュメンタリー番組の草分け『日本の素顔』や大河ドラマ『太閤記』『源義経』、大型企画『未来への遺産』などを手がけた名ディレクターとして知られた。私のレポートのタイトルは「テレビの中の『少数派』」や「テレビ・40歳の素描」「テレビ—来るべき知性のために」だった。

「もちろん、助成・援助活動と基金賞の事業が、基本的な使命ではありますが、一方で、能動的で、主体的な独自の事業にも力を入れるべきだと思います」。当時の竹中



2019年、仙台市で開催された北日本制作者フォーラム



康専務理事は「放送文化基金 20年のあゆみ」(94年刊)でこう書いたように、新たな事業を積極的に展開した。96年から各地域で始めた「制作者フォーラム」はその一つだ。制作者同士が局を超えて交流する機会は案外乏しいことから、具体的な番組をとおして放送のあるべき姿を語り合うのが目的だった。

1回目は、福岡市の「九州放送映像祭」と連携して開催された。97年には、東北の制作者を対象とした「みちのく映像祭」が盛岡市で開かれた。

私が初めて参加したのは99年3月、地域では三番目の催しとして岡山市で2日間開かれた「中四国制作者フォーラム」だった。香川県・豊島^{てしま}の産業廃棄物不法投棄問題をめぐる一連のドキュメンタリーで放送文化基金賞個人賞を受けた山陽放送の曾根英二・報道部次長をはじめ、岡山・香川地区のNHK・民放7局の世話人たちが運営を担い、「テレビの現場から元気発進！」をテーマに掲げた。参加者は20代、30代の若手や中堅が多かった。一般の視聴者も交えてのフォーラムは両日とも、250人収容の会場がほぼ埋まる盛況ぶりだった。

面白かったのは、中四国の32局が参加した「これが我が局の一押し作品」コンクールだ。ニュース番組や生ワイドなどの企画コーナーで放送された5分程度のミニ番組を上映し、そのスタッフが制作にまつわる話を披露した後、会場からの投票などで優秀作品を選ぶという趣向だった。グランプリに輝いた伊予テレビ(松山市)の『音のある風景 内子町』は、カメラマンが提案した企画とあってナレーションと音楽を排し、徹底的に音と映像で古い町並みのたたずまいを表現した。会場を沸かせたのは、広島

ホームテレビの『西田篤史のテレビランド』の人気コーナー「カラベル」。カラオケとダンベル体操をもじり、歌唱指導に合わせてダンベル体操を街頭で繰り広げるというアイデアが度肝を抜き、爆笑を誘った。

“ふだん着”のミニ番組コンテストは大きなヒットで、各地の制作者フォーラムでも踏襲されていく。

翌日は「旬の制作者大集合！」と題して、岡山・香川地区以外の地域から5人を招き、それぞれの作品を上映した。会場からは、企画を実現させるまでの苦労や具体的な方法論についての質問、意見が相次いだ。抽象論ではなく、具体的な番組を基にした対話は夜の懇親会でも続き、各テーブルで熱っぽいやり取りが見られた。

これ以降、私は北日本や北信越、中四国、九州・沖縄地区の制作者フォーラムに参加し、ミニ番組コンテストの審査員や審査委員長、講演なども引き受けてきた。

人の輪と横断的な交流

NHK政治部出身の竹中専務理事は放送文化を愛し、「放送文化基金は第二の青春」と、新たな活動に意欲を燃やした。人の交流を活発にするため、95年には「HBF ニュースペーパー」と銘打った月刊紙『わ』を創刊した。第1号ではNHK出身のノンフィクション作家柳田邦男さんに自らインタビューし、常盤新平さんらのエッセーなどが掲載された。放送文化基金の評議員だった俳優の森繁久彌さんや筑紫哲也キャスター、映画監督としてデビューして間もないテレビマンユニオンの枝裕和さんらが登場し、ノーベル賞を受けた物理学者江崎玲於奈さん



「放送番組を徹底的に語る会」の様子

と作家大江健三郎さんが対談したこともある。『わ』という名前は職員の佐藤和子さんが提案したそうで、「輪」のほかに「和」「話」という意味も込められていた。

「人の輪を作るために」と、毎月10日、20日、30日とのつく日に「ゼロの日パーティー」と称して、事務局の会議室でビア・パーティーも始めた。ただの飲み会ではなく、ゲストを招いて災害報道の勉強会もあれば、韓国の伝統舞踊の披露や番組の試写会もありで、何が飛び出すかわからないびっくり箱のようだった。夜になるため、職員の皆さんは大変だったと思うが、事務局に通う回数が増えたのは言うまでもない。

竹中さんの後任の中井盛久専務理事はこうした路線を継承し、発展させた。設立25周年記念事業として99年から始めた「放送番組を徹底的に語る会」(村木良彦代表)は、東京の制作者中心、視聴者中心、地域の制作者中心という三本柱から成っていた。東京では、相田洋さんが手がけていたNHKスペシャルの大型企画『マネー革命』や読売テレビの鶴橋康夫さんが演出した『刑事たちの夏』(ギャラクシー賞大賞受賞)などを取り上げた。この会に参加した一般視聴者の有志は「もっと語り合いたい」として、「視聴者の会」を立ち上げた。

名古屋市や大阪市での「徹底的に語る会」にも参加した私は、朝日放送の人気番組『探偵! ナイトスcoop』の松本修プロデューサーらと出会い、『わ』にレポートも書いた。山陽放送の曾根英二さん、熊本放送から長崎県立大学教授に転じた村上雅通さんとその後に続く井上佳子^{けいこ}さん、山口放送の名ドキュメンタリスト佐々木聰^{ささき とも}さんから地方の優れた作り手とも、基金の活動をとおして知り合

うことができた。こうしたつながりは、読売新聞を離れ、フリーになった今も個人的な財産になっている。

放送界の人も、異分野の専門家も、市民も自由に出入りし、横断的に交流できる放送文化基金は「放送界の広場」という公共的な役割を担っていると思う。さまざまな事業に協力してきた私はこの場で、それ以上のものを得たのかもしれない。

この原稿を書きながら、井出孫六さん、吉田喜重さん、常盤新平さんをはじめ、多くの故人のことが頭に浮かんだ。放送文化基金は、歴代のスタッフが外の人たちと築いてきた半世紀の歴史を踏まえ、放送が今後も生き生きとした文化であり続けるために前へ進んでほしい。



鈴木 嘉一 (すずき よしかず)

1952年千葉県生まれ。放送評論家。元読売新聞編集委員。元放送倫理・番組向上機構(BPO)放送倫理検証委員会委員長代行。著書は『テレビは男子一生の仕事 ドキュメンタリスト牛山純一』(平凡社)、『大河ドラマの50年』(中央公論新社)、『桜守三代 佐野藤右衛門口伝』(平凡社新書)、『脚本家 市川森一の世界』(長崎文献社、共著)など。